

読書行為の存在論

——リクール『時間と物語』における「フィクション」論をめぐって

山野弘樹

序

本稿の目的は、リクール『時間と物語』における「テキスト世界と読者の世界」（第四部第二篇第四章）の議論を、「自己の解釈学」に連なる議論として再解釈することを通して、第四章における自己同一性の弁証法の諸相を検討するとともに、「フィクション」が「歴史」へ合流すると言われる際の「歴史」概念の意味内実を明らかにすることである。

『時間と物語』（一九八三 - 八五年）という著作は、「時間と物語の媒介」という縦糸と、「歴史とフィクションの交叉」という横糸が幾重にも重なった上で構成された、諸テキストの複合的な建築物である。ここで、前者の「時間と物語の媒介」という主題に関してはさておくとしても、「歴史とフィクションの交叉」と呼ばれる一連の議論の中には、特異な位置づけを有している章が存在していることを指摘しなければならない。それは、『時間と物語』における「テキスト世界と読者の世界」の章（以下、「第四章」と略記）である。なぜその位置づけが特異なのか。その理由は、端的に述べるならば、次のようなものである。すなわち、当該の議論（『時間と物語』第四部第二篇第一章から第五章）においては、歴史記述とフィクションの双方が互いに合流・交叉するという事柄が描き出されると宣言され、またその通りに論述の流れが構成されているにも関わらず、第四章においては、そもそも歴史記述に関する直接的な言及をほとんど見出すことができないからである。しかし、それでは、第四章において想定されている（フィクションが合流するところの）

「歴史 *histoire*」とは——それが「歴史記述 *historiographie*」を意味するものでないならば——具体的にどのような事柄を言い表しているのだろうか。リクールはこの点について、十分な説明を与えていない。さらには、これまでの先行研究においてさえも、管見の限り、こうした問題提起自体がほとんどなされて来なかったように思われる⁽¹⁾。そこで本稿は、『時間と物語』における「テキスト世界と読者の世界」の章を、『生きた隠喩』（一九七五年）から『他としての自己自身』（一九九〇年）までの著作を貫く枢要な結節点として捉え直し、そのことを通じて、上述の問題に回答を与えることを試みる⁽²⁾。

本稿においては、以下の構成で議論が進められることになる。まず第一節において、「テキスト世界と読者の世界」の章の議論構成を確認しつつ、その

思想的前提として、『生きた隠喩』における問題系（すなわち「潜在的な世界」に対する「潜在的な生」）が含意されていることを確認する。次に第二節において、リクールが「含意された作者」および「含意された読者」という文学理論の概念を用いながら、〈テキストの呼びかけに応答する読者〉というモチーフを存在論的に展開していることを示す。最後に第三節において、それまでの議論を『他としての自己自身』（とりわけ第六研究）の議論と接続することで、第四章における自己同一性の弁証法の諸相を明示する。これら一連の議論を辿ることによって、第四章において「フィクション」が「歴史」へと合流すると言われるときの「歴史」概念の意味内実が、テキストの受容を契機として自己同一性の革新を遂げてゆく人間存在の「歴史性」であるということが明らかになるであろう。

1. 可能性の存在論に向けて——潜在的な世界

まずは、「テキスト世界と読者の世界」の章に関するテキスト上の事実を確認するところから議論を始めよう。第四章の議論は、その章のタイトルが示しているように、テキスト世界において展開される事柄が、読書行為を通じて読者の世界へと交叉する過程として構成されている。それぞれ、作者による読者への戦略（第一節）、テキストへの戦略の記入（第二節）、テキストへの読者の応答（第三節）が、リクールによって論じられる「三つの契機」（TR III, 231）である。また、これまでの『時間と物語』の論調とはやや異なり、『生きた隠喩』との相違点が強調されていることも重要な論点である。「読書の媒介に訴えることが、現在の作業と『生きた隠喩』の間の最も顕著な違いを特徴づける」（TR III, 230）とリクールは述べている⁽³⁾。そこでまずは、『生きた隠喩』におけるフィクション論の要点を確認しつつ、「テキスト世界と読者の世界」の議論の射程を明らかにすることを試みる。

同時代の哲学者たちと比べても実に多様な諸側面を見せるリクールの解釈学ではあるが、そもそもリクールにとって、「隠喩」とはどのような存在であったのだろうか。それは、単に日常言語における多義性を増大させるという基本的な隠喩理解に還元されるものではない。そうではなく、リクールにとって隠喩とは、「存在の剰余（*surcroît*）」を顕す詩的言語の一範例であった。こうした点に関して、リクール研究者の Vanhoozer [1990] の記述は大きな手掛かりとなる。「人間存在は「将来へと方向づけられて」おり、絶えず自己自身の前で、自己自身を可能な存在様式へと投企する存在である。（中略）リクールの哲学的人間学における最も重要な主張の一つは、人間存在に対しては

存在の剰余があるということ、そして、この存在の剰余こそ可能性に他ならないということである」⁽⁴⁾。言い換えれば、リクールの解釈学は、〈別様に存在すること〉へ向けて、すなわち可能性の存在論に向けて企図されていたのであり、こうした企図を可能とする詩的言語の範例として、リクールは隠喩の哲学的探究へと舵を切ったのである。

リクールは、言語によって私たちに開示される世界を「テキスト世界」と呼ぶ。そして、フィクションによって提起されたテキスト世界とは、別様の存在可能性をその内に秘めた潜在的な世界である。言うなれば、詩人や作者の創造性は、読者に供されるテキスト世界を展開することを通して、世界の可読性を書き換え続けていくところに存するのだ。

こうして構想されるテキストの世界は、日常的な仕方における生の連関の中では決して出逢うことのない新しき存在をもたらす。その動性を、リクールは「疎隔(distanciation)」と呼ぶ。フィクションにおけるテキスト世界は、これまで開かれていた現実の諸アスペクトに対して距離を置くことによって、現実をめぐる新たなヴィジョンを提示する。このように、新たな存在可能性を発見し、「存在の剰余」を増大せしめる「疎隔」の力能こそは、フィクションが行使する存在論的効力に他ならない。こうした点について、リクールはすでに『生きた隠喩』の時点で次のように述べていた。

詩的仮説とは、想像的、虚構的な様態における世界の提起である。(中略)
しかし、潜在的な生とは何か？ そこに住まうことができるような潜在的な世界なくして、潜在的な生とは存在するのであるか？ 別の世界——すなわち、別の実存可能性に対応するような、あるいは、最も固有な私たちの可能性に対応するような別の世界を出現させることこそが、詩の機能ではないだろうか。(MV, 288)

フィクションを創造するということは、日常に対する疎隔をもたらし、そこに住みうるような潜在的な世界を創造することである。さらに言えば、可能性としての人間が、テキストによってもたらされる可能な存在へと自らを投企することを通して、自己自身を変容する——そのような素地を、フィクションは生み出すのである。

『生きた隠喩』におけるフィクション論とは、このような企図のもとに構想されたものであった。続けて私たちは、節を改めつつ、住みうる世界の変容と相即した自己の変容という議論がいかにして『時間と物語』において継承されてゆくのか、という点を検討しなければならない。

2. テクストの呼びかけと応答する読者——潜在的な生

前節においては、『生きた隠喩』におけるテキスト世界の創造論に議論の焦点を当て、『時間と物語』におけるフィクション論への最初の一步を踏み出した。だが、そのようにして創造されたテキスト世界は、そのままでは、内在における超越に留まるとリクールは述べる (cf. TR III, 230)。実際、埃をかぶった書庫のテキストは、自らの潜在的な世界に対して沈黙したままであろう。それが再び活性化し、私たちの意識に世界を——さらに言えば、潜在的な生を——提示するようになるのは、私たちが読書行為を遂行するときである。第四章の構造を貫いているのは、こうした「読書行為」の弁証法、ないし「再形象化 (refiguration)」の弁証法であり (cf. TR III, 229, 238, 246, 259)、そこでとりわけ中心的に主題化されているのが、「読む主体」(TR III, 231)における「〈同〉と〈異〉の間の変動」(TR III, 261)である。そこで本節においては、紙幅の関係上、こうした第四章の議論の中核となるリクールの分析(第四章第三節)を重点的に取り上げることを通して、「自己の解釈学」に連なる議論として第四章を解釈するための道筋を提示することを試みたい。まず、導きの糸となるのは、リクールによる次の一節である。

コミュニケーションは作者から出発し、作品を経由し、読者に到着点を見出す。実際、説得が発するのは作者からであり、説得は読者を標的にする。読者がその統合形象化 (configuration) に同行し、かつ、そうしたテキスト世界の提起を自己同化する (s'appropriant) ことによって応答するのは、まさにこの説得の戦略に対してなのである。(TR III, 231)

リクールは引用文の中で、作品の制作を实践する「作者」の側と、読書を实践する「読者」の側との対話的關係性について述べている。ここで、〈「統合形象化」に「同行」する〉、あるいは、〈「テキスト世界の提起」を「同化」する〉というリクールの表現に注意しよう。まず、読者による「統合形象化」とは、文化的なテキストを受容する段階、すなわち「再形象化」である。再形象化とは、テキストに対して単に受動的な態度を示すということでは全くない。むしろ「テキストの受容」は、「読むという行為そのもの」として積極的に理解されている (cf. TR III, 243) ⁽⁵⁾。ここで言われている能動性とは、端的に述べるならば、あるテキストを読む際に、その解釈の射程を見定めるために (読者によって) 補われるコンテキストの布置に応じて、その当該テ

クストの意味作用の範囲が変容する、という事態を意味するものである。

そして、こうした生産的な理解という文脈においてこそ、「読者による応答」という主題が導入される。リクールはヴォルフガング・イーザーおよび H. R. ヤウスの議論を引き合いに出しつつ、自らの「読書の現象学」を構成していくのだが、その中でリクールは、「読者による応答」という契機を主軸としながら、次のように述べる。

この応答＝効果理論の利点は明白である。テキストによって供給される標識と、読書の総合的活動との間に、均衡が探し求められるのだ。私は次のように言いたい。すなわち、この均衡はこうした力動性の不安定な効果であり、それによって、構造の観点からのテキストの統合形象化は、経験の観点からの読者による再形象化と同等になるのである、と。(TR III, 248)

ここで明示される〈テキストの構造〉と〈読者の経験〉の弁証法は、その直後に、フィクションの修辞学の議論を援用することを通して、「含意された作者 (l'auteur impliqué)」と「含意された読者 (le lecteur impliqué)」の相互性の次元へと移し替えられる⁽⁶⁾。「含意された作者」とは文学理論の概念であり、実際の作者と同一視されることのない、読者によって想定される仮説的な作者のことである。だが、こうした仮説化のベクトルは、読者から作者への方向に尽きてしまうことはない。読者の応答を喚起するテキスト世界には、「含意された読者」の存在する余地が生まれるのである。

そしてリクールは、文学理論から援用した「含意された作者」と「含意された読者」という着想を導入することで、次のような決定的洞察を述べる。

テキスト内で構成されるものとして、両者は互いに、現実存在のフィクション化された相関物である。つまり、含意された作者は作品の個別的文体と同一視され、含意された読者は、作品の送り手が呼びかける受け手と同一化されるのである。(中略) 語り手と関連して、含意された読者は現実化 (actualisé) されない限り、潜在的 (virtuel) なままである。このように、現実の作者は含意された作者の中に消えるのに対し、含意された読者は、現実の読者のうちに具現化する。(TR III, 249)

ここでリクールは、現実の作者が含意された作者の中で姿を消すのに対して、含意された読者は、まさに現実の読者の中でその潜在性を現実化させると述

べている。こうした着想は、潜在性をめぐる『生きた隠喩』の議論を、文学理論の観点から発展させたものである。現実の読者は、テキストの問いかけに応答することによって、本来は他者的な経験であった潜在的読者の経験を、自らのものとする。簡明に述べるならば、「読書の間に、経験自体が変化する」のである。リクールはまさにこうした事態を、「テキスト世界の提起」を「同化」するという表現において語り出していた。そして、第四章の議論そのものを貫く形でリクールが「地平融合」ないし「〈同〉と〈異〉の間の変動」というモチーフを設定したのは、こうした「変動」が、まさに「読む主体」によって、そして「読む主体」においてこそ生じるからに他ならない。また、読書行為によって解放されるテキストの潜在性とは、別様の世界に関する潜在性であると同時に、そうした世界に住まう自己の在りように関する潜在性でもある。すなわち、こうした事態を示している第四章の議論は、「読書行為」という現象に力点を置くことを通して『生きた隠喩』との相違点を明示しつつも、両著作の間で共通する「生」ないし「自己」の変動という事柄に焦点を当てた議論として理解されることができよう。

かくして、私たちは『生きた隠喩』の議論を接続することによって、第四章において展開されていた「読む主体」、および〈テキストの呼びかけに応答する読者〉という議論の輪郭を明らかにすることができた。しかし、「テキスト世界と読者の世界」の章を「自己の解釈学」に連なる議論として再解釈するためには、こうした考察が、（まさに「自己の解釈学」を展開する）後年の主著『他としての自己自身』においても密接に関係しているということを示さなければならない。そのため私たちは、節を改めつつ、『他としての自己自身』の議論を導入することを通して、第四章における「〈同〉と〈異〉の間の変動」という表現の内実をより明確な仕方で分析することにしたい。

3. 〈他者〉との対話——読書行為と現勢化

まず私たちは、前節において展開された議論が、『他としての自己自身』（とりわけ第六研究「自己と物語的自己同一性」）といかなる点において接続されるのかを確認するところから議論を始めたい。その有力な手掛かりとなるのが、リクールが『時間と物語』「結論」第一節の末尾において、自らの「読書行為」論（第四章）とエマニュエル・レヴィナスの著作とを結びつける形で、「自己」ないし「自己同一性」の議論に倫理的な次元を付与しているという点である。この箇所は、「物語的自己同一性（*identité narrative*）」概念が妥当する範囲に自ら制限を加えているというだけでなく、さらにそこに「倫理

的責任」(TR III, 359) という要因を与えることで、『他としての自己自身』の議論を言わば予告する内容にもなっている。したがって私たちも、「物語的自己同一性の観念がその限界に遭遇し、行動する主体を形成する非物語的要素へと合流する」(ibid.) とされる際の議論の要点を検討することにしよう。

まず、リクールは『他としての自己自身』第六研究において、「同一性 (mêmeté) と自己性 (ipséité) の間を揺れ動く物語的自己同一性と、自らの行為に責任のある個人を要求する倫理的自己同一性 (identité éthique) とを対決させる」(SA, 179) と述べる。ここで言われている「倫理的自己同一性」とは、「物語的自己同一性」とは異なり、他者との対面の場面において、他者からの呼び声に応答する「自己性」を指す概念である⁽⁸⁾。誰かを必要としている他者が「どこにいるの？ (Où es-tu?)」と尋ねるとき、「私はここにいます (Me voici!)」と応答する「私 (me)」は、それまで安定した「同一性」として機能していた「私 (je)」と同一のものではない (cf. SA, 195)。「誰かが私を信頼する (compte sur) が故に、私は他者の前で、自分の行為に対して責任がある (comptable)」(SA, 195) とリクールは述べる。すなわち、「自分自身をある義務のもとに置き、同時に他者に対する責任を負うようになる」⁽⁹⁾という仕方で、同一性としての自己同一性に対立する、他なるものを前にした自己性——それこそが、「倫理的自己同一性」である⁽¹⁰⁾。

さて、こうした「自己」論への展開は、『他としての自己自身』という著作の中で突然生じてきたものなのであろうか。この点について考えてみる必要がある。

確かに、『時間と物語』においては、〈私〉自らが〈私〉の人生物語を語り出し、それを通じて自らの自己同一性を獲得するのだ、というテーゼに力点が置かれているようにも見える⁽¹¹⁾。だが、それと同時に、リクールが「結論」第一節の末尾において「物語的自己同一性」の概念に関する二つの限界について述べていたことを指摘する必要があるだろう。(cf. TR III, 358)。それぞれ、(1)「物語的自己同一性」は首尾一貫した「自己同一性」ではない、という点と、(2)「物語的自己同一性」は主体の「自己性」の問題を汲み尽くしてしまうものではない、という点である。こうした二つの論点は、〈他者からの呼びかけに応答する主体の力動的変動〉という主題と連関して提出されたものである。そしてこうした主題は、まさに私たちが本稿において検討してきた第四章の議論と軌を一にするものである。なぜならば、リクールは第四章において、〈テクストとの対話的關係に入ることを通じて、現実の読者が自らの内で潜在的な読者を現勢化させる〉という議論を展開していたからだ。

こうした現勢化の過程こそは、全き主観性の中に自閉した主格としての「私 (je)」から脱却し、「作品の送り手が呼びかける受け手」としての——すなわち、テキストの呼びかけに応答する「対格」(accusatif)としての「私 (me)」を、読者が自らのものとする絶えざる運動の過程に他ならない。したがって、『他としての自己自身』において展開される「自己」論は、本稿において検討されてきた第四章の議論において、すでに萌芽的な形で展開されていたと見ることができるだろう⁽¹²⁾。

だからこそ、こうした現勢化の運動をめぐって、リクールは第四章の末尾で次のように述べていたのである。「読者がそこへと移住するフィクション世界の非現実性に応じて、読者は自己自身を非現実化する」(TR III, 262)。ここで「非現実化する」と言われる事柄とは、これまで自らの自己同一性として再認してきた同一性を喪失しつつ、「最も固有な私たちの可能性に対応するような別の世界」(MV, 288)へと自らの存在を投企することを通して、別の自己性を獲得するということである。それは、読書行為ないし再形象化の弁証法を展開する第四章を貫く枢要な解釈学的洞察であった。それだけではない。リクールは、こうした「自己肯定と自己消失の弁証法」(SA, 198)という着想を、すでに1975年の論文「疎隔の解釈学的機能」において、「私は読者として、自己を喪失することによってのみ自己を見つけだす」(FD, 215)という表現のもとに語り出していた。こうした点を確認するならば、『生きた隠喩』期から『他としての自己自身』にまで至る思考の道程の中で、リクールが段階的に「自己の解釈学」の体系を構築していったことはもはや明白であろう。すなわち、リクールの力点は、他なるもの——すなわち、作者によって提起された「異質な世界」(TR III, 358)——との「対話」の関係性に入ることを通して、自らの物語的自己同一性が、絶えず作られたり壊されたりし続けるという自己喪失・獲得の過程を、克明に描き出そうとするところに存するのである。

まとめよう。リクールは第四章を、単に読者がテキストを受容するという議論として提示していたのではなかった。それは、読書行為を通じた自己同一性の弁証法の運動を描き出す、言わば読書行為の存在論として展開されていたのだ。私たちはテキストの提起に応じて、別様の存在可能性へと自らを投企し、実践的に自らの行為および存在を変容する。それは、潜勢力(*dynamis*, *puissance*)を有したテキストを読むという行為(*acte*)——さらには、テキストの教えに倣うことで可能となる一連の諸行為——を通して、潜勢力を現勢力(*energeia*, *acte*)たらしめることによって行われるのである⁽¹³⁾。未だ現勢化されぬ他者を自己同化することを通して、他者としての自己を顕わす

すということ——それこそが、リクールによって洞察された自己喪失 - 獲得の運動であり、そしてここにこそ、「テキスト世界と読者の世界」の議論を、「自己の解釈学」として解釈するポテンシャルを見出すことができるのだ⁽¹⁴⁾。

さらに、ここで私たちは、こうしたテキストによる「革新」と読者による「受容」の往還関係を、リクールが「歴史性 (historicité)」(TR III, 253) として捉えていることに注意する必要がある。それは、世代間を通じた作品受容の「歴史的な次元」(TR III, 262) でもあり、さらには、人間の地平を拡大してきた読書による「歴史的媒介」(TR III, 251) でもあるだろう。実際、リクールはこうした事柄を、第一部第三章の時点において、次のように表現していたのである。

テキストを理解すること、それは、単なる環境 (Umwelt) から世界 (Welt) を形成するすべての意味作用を、私たちの状況の諸述語の中に書き込む (interpoler) ことである。実際、私たちが実存の地平を拡大させることができるのは、その大部分を、フィクションの諸作品に負っているからである。(TR I, 121)

この示唆に富む引用の中で、リクールは、私たちの実存の地平の拡大は、フィクションを受容する読書行為の歴史性に即応する仕方であると述べている。すなわち、読書行為に供されるフィクション作品は、実践的活動と密接に結びついた人間の歴史性へと沈殿してゆくのである。

ここまで確認することによって、私たちは冒頭で掲げた問い、すなわち、第四章においてフィクションが合流すると言われる「歴史」の内実について、明確な回答を与えることができる。それは、歴史家によって書かれる「歴史記述」の類ではない。そうではなく、それは読書行為を主軸とした革新と受容の「歴史性」であり、こうした歴史性に則りつつ、自らの実存の地平を拡大させてきた人間存在の「歴史性」を指し示す概念なのである。もちろん、〈テキストによる革新と読者による受容の往還関係〉から歴史記述が排除される、というわけではない。リクール自身も第五章の冒頭で述べているように、「私たちは小説の読者であるのに劣らず、歴史の読者でもある」(TR III, 265) からだ。しかし、第四章の議論が合流することになる「歴史」の概念が、少なくともこれまでリクールが『時間と物語』の中で主題的に扱ってきた「歴史記述」とは異なる概念を意味していることは理解されなければならない。だからこそ、「歴史記述」に関する直接的な言及が、第四章においてはほとんどなされなかったのである。かくして私たちは、「テキスト世界と読者の世界」

の章を「自己の解釈学」に連なる議論として再解釈することを通して、第四章における自己同一性の弁証法の諸相、および（「フィクション」が「歴史」へ合流すると言われるときの）「歴史」概念の意味内実を解明することができたと言えるだろう。

結論

本稿は、『時間と物語』における「テキスト世界と読者の世界」の章を「自己の解釈学」に連なる議論として再解釈することを通して、次の二つの結論を得ることができた。一つは、第四章において展開される「読書理論」には、自己同一性の弁証法の諸相をめぐる議論が含意されていたということである。そしてもう一つは、上述の議論を通して、「フィクション」が「歴史」へ合流すると言われるときの「歴史」概念の意味内実を、革新と受容の「歴史性」、および人間存在の「歴史性」として解釈する筋道を提示したということである。本稿は、「歴史」と「フィクション」の間の「平行関係」をめぐる積極的な解釈を提示することができなかった従来の『時間と物語』の研究状況に対して、一石を投じる試みであった。

今後の課題は、本稿の成果を踏まえつつ、『時間と物語』第四部第二篇第五章「歴史とフィクションの交叉」を整合的に解釈することである。そして、「歴史とフィクションの交叉」をめぐる一連の議論を体系的に解釈することができた暁には、『時間と物語』という著作に込められた歴史的存在論の地平をより明瞭に描き出すことができるであろう。

注

(1) 例えば、Vanhoozer [1990]、Mongin [1994]、Grondin [2013]などの著名なリクール研究者たちは、「歴史」と「フィクション」が交叉するというリクールの所見を紹介するのみで、その内実に踏み込んだ解釈をほとんどしていない。こうした事情は、例えば聖書の物語 *Joseph et ses freres* を引き合いに出しつつリクールの「フィクション」論を分析する Greisch [2001] (cf. p. 215) や、『時間と物語』におけるリクールの「自己同一性」論を批判的に整理する Michel [2006] (cf. p. 80) においても同様である。

(2) そのため、本稿においては、紙幅の関係上、『時間と物語』第三部、および第四部第二篇第二章、第五章第二節に関する詳細な考察を包含すること

ができなかった。これらの議論に関しては、今後別の機会に詳述することとしたい。

(3) ただし、リクールが 70 年代半ばの『生きた隠喩』期において、「読む」という契機を全く等閑視していたというわけではない。この点については、拙論 [2019]を参照されたい。

(4) Vanhoozer [1990], p. 7.

(5) 「生産的な受容」という主題に関しては、Jauß [1970] 第 1 章を参照。

(6) Booth [1983], p. 71, 302 を参照。

(7) Iser [1994], p. 215.

(8) リクールは自らの「自己同一性」論において、「同一であること (même-té, idem)」と、「自分自身であること (ipséité, ipse)」という二つの契機を区別している。この点について、詳しくは北村清彦 [1998] pp.4-7 を参照。

(9) Ibid., p.11.

(10) ただし、「物語的自己同一性」と「倫理的自己同一性」が、単純に対立する関係にあるわけではないことに注意されたい。

(11) 実際、耐え難い断片的な話を一つの首尾一貫した物語に変形することで、被分析者が自らの自己性を認めるという精神分析の事例を引き合いに出しつつ、リクールは次のように述べる。「主体は、その人が自分について自ら自己語りする物語の中で、自己を認識する」(TR III, 357)。

(12) あくまでも「萌芽的」という表現に留まるのは、『他としての自己自身』と『時間と物語』においては、対話的關係に入るところの「他者」の意味内実には差異が見られるからである。前者において、それは〈対面する他者〉であり、後者において、それは〈目の前に広げられたテキスト〉である。だが、〈自らの実存の地平の外部から到来する「他者」に対して主体が応答する〉という議論の構造は、「自己の解釈学」における基本的な議論の図式として、両著作の間に共通して確認することができると言えよう。

(13) リクールは自らの存在論の中で、アリストテレスの“*energeia*”の仏語訳である“*acte*”と、人間の「行為」の意味での“*acte*”の重なりを意識的に用いている。この点について、詳しくは杉村靖彦 [1998]、第 4 章を参照。

(14) なお、こうした議論は明らかにレヴィナスの「身代わり (substitution)」論と密接な関連を持つものだが、リクールとレヴィナスの間の思想的連関というトピックは、別稿にて詳細に展開することにしたい。

引用文献略記号

- MV Paul Ricœur, *La métaphore vive*, Paris: Seuil, 1975.
- FD Paul Ricœur, « La fonction herméneutique de la distanciation », dans *Exegesis: problèmes de méthode et exercices de lecture (Genèse 22 et Luc 15)*, Delachaux & Niestlé: Neuchâtel, 1975.
- TR I Paul Ricœur, *Temps et récit, t.I: L'intrigue et le récit historique*, Paris: Seuil, 1983.
- TR II Temps et récit, t.II: La configuration du temps dans le récit de fiction, Paris: Seuil, 1984.
- TR III Paul Ricœur, *Temps et récit, t.III: Le temps raconté*, Paris: Seuil, 1985.
- SA Paul Ricœur, *Soi-même comme un autre*, Paris: Seuil, 1990.

参考文献

- Booth, C. W., *The Rhetoric of Fiction*, Chicago, University of Chicago Press, 1961, 1983
- Greisch, Jean, *Paul Ricœur. L'itinérance du sens*, Grenoble: éd. J. Million, coll « Krisis », 2001, 2015.
- Grondin, Jean, *Paul Ricœur*, Paris: Presses Universitaires de France, 2013.
- Iser, Wolfgang, *Der Akt des Lesens: Theorie ästhetischer Wirkung*, München: Wilhelm Fink, 1976, 1994.
- Jauß, H. R., *Literaturegeschichte als Provokation*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1970.
- Lévinas, Emmanuel, *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, La Haye, Martinus Nijhoff, 1974.
- Michel, Johann, *Paul Ricœur. Une philosophie de l'agir humain (Passages)*, Paris: Cerf, 2006.
- Mongin, Olivier, *Paul Ricœur*, Paris: Seuil, 1994
- Vanhoozer, K. J., *Biblical narrative in the philosophy of Paul Ricœur: A study in hermeneutics and theology*, Cambridge: Cambridge University Press, 1990
- 川口茂雄『表象とアルシーヴの解釈学——リクールと『記憶、歴史、忘却』』京都大学学術出版会、2012年。
- 北村清彦「繰り返される自己の物語：ポール・リコールの自己論」北海道大学文学部紀要、第47号、1998年、1-27頁。

——『藝術解釈学——ポール・リクールの主題による変奏』北海道大学
図書刊行会、2003 年。

佐藤啓介「物語の後で——『時間と物語』から見た『記憶・歴史・忘却』」『フ
ランス哲学・思想研究』、日仏哲学会、第 13 号、2008 年、29-38 頁

杉村靖彦『ポール・リクールの哲学——意味の探索』創文社、1998 年。

長門裕介「ミメシスはなぜ要請されるのか：イーザーからリクールへ」『エ
ティカ』慶應義塾大学倫理学研究会、第 4 号、2010 年、135-158 頁。

藤岡俊博『レヴィナスと「場所」の倫理』東京大学出版会、2014 年。

巻田悦郎『リクールのテキスト解釈学』晃洋書房、1997 年。

山野弘樹「ミメシスの創造性——リクール解釈学の視座から」『哲学の門』
日本哲学会、第 1 号、2019 年、40-53 頁。

※本論文は、令和元年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費、課題番号
19J20389）による研究成果の一部である。